audite

French Cello

aud 97.802

EAN: 4022143978028

4 0 2 2 1 4 3 9 7 8 0 2 8

Record Geijutsu (01.05.2022)

Ja[illegible]he Rezen[illegible]siehe PDF!

»audite« Ludger Böckenhoff • Tel.: +49 (0)5231-870320 • Fax: +49 (0)5231-870321 • info@audite.de • www.audite.de

岡部真一郎●Shinichiro Okabe

推薦 1969年、フランス北東部アルザスの中心都市たるストラスブール生まれのチェリスト、すでに20年近くパリの母校で後進の指導に当たっているほか、近年は指揮者としても活動しているコペーの「フレンチ・チェロ」と題されたアルバム。ジャケット写真はパリで撮られたようで、おそらくは早朝のセッションか、オペラ（ガルニエ座）を背に大通りの真ん中で楽器を構えるショットもあるが、録音は、2021年4月、4日にわたりストラスブールで行なわれている。共演は歴史を誇る同地のオーケストラとジョン・ネルソンである。

サン＝サーンスとラロをメインに据え、さらにフォーレの小品などを配したアルバムの幕開けは、1862年、アルザスのエンシスアイムに生まれた作曲家で、オルガニストでもあったボエルマンの《交響的変奏曲》。オルガン作品の他、ナヴァラの録音などで知られるチェロ・ソナタなども残している早逝の音楽家が書いたチェロと管弦楽のためのフランクを想起させる協奏的作品だ。コペーの特別の思い入れは、アルバム構成の意図を大きなコンテクストの中で示す選曲のみならず、実際に演奏の随所に明らかで、愛器ゴフリラーによる豊かな歌はことに印象的だ。続くサン＝サーンスの第1番でのバランスの良さ、ラロの濃密なロマンティシズムもまた、作品の本質をしっかりと捉えつつ、自らの「声」をそこにしっかり刻印している。そして、アンコール・ピースよろしく〈白鳥〉がアルバムを締めくくる。

■フレンチ・チェロ

〔①ボエルマン：交響的変奏曲②サン＝サーンス：チェロ協奏曲第1番③フォーレ：エレジー④ラロ：チェロ協奏曲⑤サン＝サーンス：動物の謝肉祭～白鳥〕
マルク・コペー(vc)ジョン・ネルソン指揮ストラスブール・フィルハーモニー管弦楽団
[アウディーテⒹKKC6505] ¥3300

峰尾昌男●Masao Mineo

[録音評] 最近のオーケストラ付きの作品では珍しくなったセッション録音。左右いっぱいに広がるオーケストラのほぼセンターにソロ・チェロが定位する。オーケストラは響き感を伴いながら十分に解像度を保って聞こえるが，チェロはそれ以上のクリアさで聞こえ，もう一歩進むと浮き上がってしまうところで踏みとどまっている。全体的にスケールを感じさせる録音。〈92〉

広瀬大介●Daisuke Hirose

推薦 19世紀、ピアノやヴァイオリンに比べ、チェロのヴィルトゥオーゾが出現するのは遅かった。超絶技巧を必要とする協奏曲におけるチェロの可能性が本格的に開拓されたのは、ドヴォルザークのチェロ協奏曲初演を受け持ったハヌシュ・ヴィーハンなどが現われて以降のこと。本作に収められた普仏戦争後のフランスで生まれた協奏的作品の数々もまた、パリで数多くの新しいヴィルトゥオーゾが活躍したことを物語る。

近年では《スペイン交響曲》の演奏頻度もすっかり減ってしまったが、エドゥアール・ラロによるチェロ協奏曲もまた、決して忘れられてよい作品ではない。オペラ的、ベル・カント的表現手法から多くを吸収したと思われるその音楽語法がチェロ独奏と相性がよいのは明白で、バリトン歌手のごとく朗々と旋律を響かせるマルク・コペーの演奏は堂に入っている。

これはカントロフのピアノ協奏曲パートでも述べていることだが、サン＝サーンスの協奏曲は、基本的に特定の楽器で演奏されることをあまり想定していないように感じられてならない。特定の楽器にあまり依存しないハイブリッドな音楽に馴染めるかどうかが、この作曲家への好悪を分かつのではないか。コペーの演奏は、サン＝サーンスの音楽の普遍性、そしてチェロとしての特性、相反するふたつの要素をうまく調和させた、ギリギリの線を狙ったものに感じられ、そのすぐれた知性が音楽を下支えしているのが聴き取れよう。